



明峰

令和7年6月18日

第7号

校長 岡野利男

※市中総体の選手諸君の大活躍には本当に感激しました。総勢43名の県中総体出場という結果も大変立派です。

「勝って反省、負けて感謝」それぞれ次なる目標に向かいましょう。

紐解く（前編）

制服については、4月以降、制定委員会で検討することとし、10月1日からの着用をメドにすすめる。

ア 1年は、それまでの間、私服で登校する。

イ 2、3年は旧校の制服でそのまま卒業まで通す。

いきなりなんのこと？と思われましたよね。これは、明峰中学校初代校長である山口八郎先生が残された「明峰中学校開校要覧」から一部を抜粋したものです。確かに、明峰中学校第1回生と第2回生の卒業アルバムを開くと、そこには、旧本野中の制服を着た卒業生、北諫早中や西諫早中の制服を着た卒業生がそれぞれ存在します。それに加え、明峰初年度の最初の半年間は、私服の1年生がいたという事実が分かりました…。

校長室に大切に保管されているたった一冊の開校要覧。今号と第8号では、山口校長先生の記録やその他の資料から見える明峰中学校開校当時の様子を『紐解く』と題して、紹介していきます。

昭和60年4月に産声を上げた明峰中学校は、今年で満40歳。開校にあたり、どのような議論がかわされたのか、どのような準備が重ねられたのか、そして新たな学校にどれだけの思いが込められたのか、そんなものが伝わってくる一冊でした。

後に、諫早史談会長として活躍された山口八郎先生をご存知の方はきっと多いはずです。山口先生は、先述のとおり明峰中学校初代校長です。そして、その前年度は本野中学校の第13代（最後）校長であり、同時に、明峰中学校開校準備の最高責任者も務められています。この事実から分かることがありますよね。そうです。

明峰中学校の前身は本野中学校なのです。記録の中から、その証拠となる次の一文も見つけました。「本野中学校から明峰中学校に引き続き勤務する教員には、県教育委員会からの辞令は出ない。」当時、教員の転勤に際して、『〇〇学校の教諭 誰々。あなたに□□学校への異動を命ずる』という辞令が、一人一人の対象者に出されていた時代です。その辞令が旧本野中に

勤務していた先生には出ないというのです。ちなみに、北諫早中や西諫早中から転入してきた先生には辞令が出て

います。学校名は変更するものの、そもそも明峰中の母体は本野中であるということを証明するものです。

ここで、当時の様子を少しだけ確認。一時期は、1学年の人数が100名をゆうに超える生徒数を誇った本野中学校も生徒数が激減し、昭和50年代終盤には1学年1学級に。「適正な規模で学校生活を送らせてあげたい」とする地元の方々の長年の思いがありました。一方、北諫早中学校においては、予想を上回るスピードで生徒数が増加し、教室数の不足が懸念される状態にまでなったとのこと。そのため、御館山小学校区が分離して新たにできる中学校に統合する運びとなったそうです。さらに、破籠井地区については新たな学校が建設される場所に隣接する地区であるため、西諫早中学校から分離して統合されることになります。これにより、明峰中学校が誕生することとなりました。

初代山口校長先生が、昭和59年12月（明峰開校3か月前）に本野中職員に向けて書かれた文章がとても素敵で、鳥肌が立ちました。紹介します。

新しく誕生する明峰中学校は、本野、御館山、破籠井3地区住民のそれぞれの深い願いが込められている。すなわち、子供たちに優れた教育の場を保障してほしいという願いである。本野町以北、及び永昌、永昌東地区は、通学距離が今より極端に長くなる。それをおしてなお余りある効果の実現を新中学校は背負っているということができる。

3地区住民の意思の結集とはいえ、その一人一人にあまねくその趣旨が完徹することは不可能であろう。統合不満が完全にはないとは言えない。統合してよかったとすべてが納得できる道は、新中学校第1年次の歩み如何にかかっているということができる。我々は、このことを肝に銘じて新しい学校づくりに取り組まなければならない。

61年度までは、バラエティに富んだ服装の集団である。統一とは、目に見えない心の結びつきである。それを目に見える制服の力を借りて、一般に行っているものを、我々は純粋に目に見えない心の動きとして、この実現を図る。

まさに、言霊の宿る初代校長としての決意と覚悟の文章です。校長室の山口校長先生の写真を前に、背筋が伸びました…。

次号は別の角度から紐解きます。お楽しみに。

